

# キリスト教と文学

## 第三集

笹渕友一編

キリスト教と文学 研究会



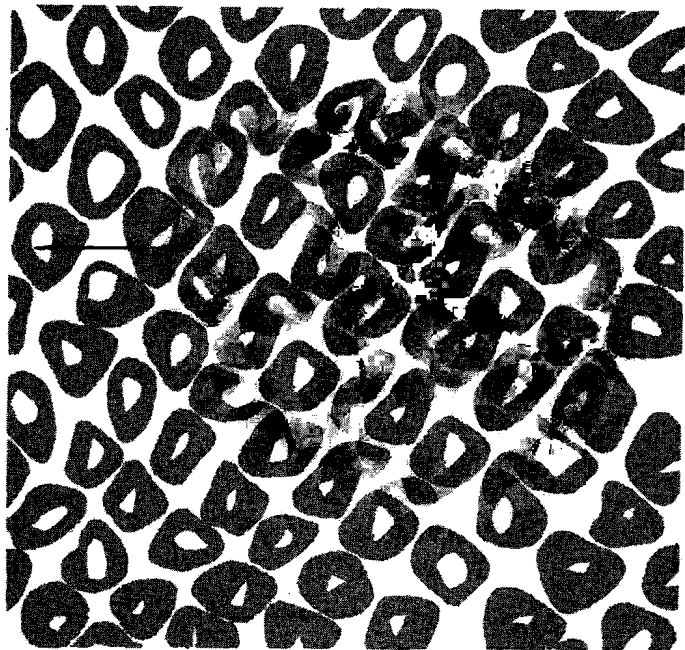
笠間書院刊

# キリスト教と文学

第三集

笹淵友一編

キリスト教と文学 研究会



笠間書院刊

笠間選書 28 「キリスト教と文学」第三集  
昭和 50 年 4 月 30 日初版第 1 刷発行  
定価 1,000円 一検印省略—  
編者 「キリスト教と文学」研究会 代表者 笹淵友一◎  
発行者 池田猛雄  
印刷 科学図書印刷株式会社  
製本 笠間製本所  
発行所 有限会社 笠間書院  
〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46  
電話 03-294-0787・0996 振替東京 1-56002  
書籍コード 1391-953028-0924

## キリスト教と文学 執筆者紹介

### 第一集

笹淵 友一

ノートルダム清心女子大学教授

中山 和子

明治大学助教授

小田桐弘子

国学院大学講師

原 恵

青山学院大学教授

村松 定孝

上智大学教授

寺園 司

青山学院大学教授

神田 重幸

関東短期大学助教授

川合 道雄

明治文化研究家

伊東 一夫

東洋大学教授

山極 圭司

都立戸山高教諭

天野 茂

比治山女子短期大学教授

### 第二集

橋浦 兵一

宮城教育大学教授

上田 哲

県立花巻養護学校教諭

朝下 忠

山梨英和短期大学教授

川 鎮郎

国際基督教大学助教授

宮坂 覚

福岡女子大学専任講師

水谷 昭夫

関西学院大学教授

辻橋 三郎

神戸女学院大学教授

鈴木二三雄

フェリス女学院大学元教授

東京商船大学講師

菊田 義孝

作家

佐古純一郎

二松学舎大学教授

後藤 亮

国学院大学・青山学院大学講師

池田 純滋

上智大学助手

### 第三集

清水 護

東京女子大学教授

斉藤 和明

国際基督教大学準教授

小泉 一郎

学習院大学教授

源 哲磨

専修大学教授

山形 和美

フェリス女学院大学教授

柳生 直行

関東学院大学教授

中野 記偉

上智大学教授

尾崎 安

青山学院大学教授

剣持 武彦

二松学舎大学教授

大岩 鋤

佐賀家政大学元教授・評論家

小玉 晃一

青山学院大学教授

『キリスト教と文学』第一集

北村透谷「内部生命論」

「キリスト教と文学」の方法化の一つの実践……笹淵 友一

透谷における「心」の問題……中山 和子

北村透谷と平和運動……小田桐弘子

明治前半期の日本基督一致教会の

讃美化について……原 恵

泉鏡花とキリスト教……村松 定孝

作品「武蔵野」の一考察……寺園 司

徳富蘆花とキリスト教

「新春」を中心として……神田 重幸

綱島梁川の神——その思想的形成期の苦悩から——川合 道雄

宗教小説『相愛記』論……伊東 一夫

野性の信徒——木下尚江のキリスト教——山極 圭司

松岡荒村と田中正造

「無告の民」と「愚」について……天野 茂

『キリスト教と文学』第二集

漱石のキリスト教的なものについて……橋浦 兵一

啄木のキリスト教受容と

社会主義への移行……上田 哲

武者小路実篤の『耶穌』……朝下 忠

芥川竜之介作「奉教人の死」について……川 鎮郎

芥川竜之介とキリスト教——その二面性（カトリシズム・

プロテスタンティズム）をめぐって……宮坂 覚

久留島武彦……水谷 昭夫

賀川豊彦の詩——「涙の二等分」について……辻橋 三郎

八木重吉の詩……鈴木三雄

太宰文学における気品の表現

「右大臣実朝」をめぐって……菊田 義孝

椎名麟三の『美しい女』について……佐古純一郎

うら若き大岡昇平へ改稿……後藤 亮

大岡昇平と八少年時——中原中也伝の視点——池田 純益

# 目 次

|                            |    |    |    |
|----------------------------|----|----|----|
| シェイクスピアと聖書                 | 清水 | 護  | 一  |
| 楽園の地獄―『失楽園』第九巻について―        | 斎藤 | 和明 | 二六 |
| 野性への志向―エマソンにおける自然神秘主義―     | 小泉 | 一郎 | 四六 |
| ホーソンの作品における罪の問題            | 横沢 | 四郎 | 六六 |
| フランツ・カフカにおける“神”            | 源  | 哲麿 | 七〇 |
| ペルソナの喪失―ジョイスにおける文学と宗教―     | 山形 | 和美 | 二九 |
| D・H・ロレンスとキリスト教             | 柳生 | 直行 | 三三 |
| G・グリーンの現代性                 | 中野 | 記偉 | 三六 |
| 宗教詩の定義について―ヘレン・ガードナー女史の場合― | 尾崎 | 安  | 三九 |
| トルストイ『アンナ・カレーニナ』と島崎藤村『家』   | 剣持 | 武彦 | 四九 |
| 白鳥の臨終とキーツの臨終―二者にみる伝統の違い―   | 大岩 | 鉦  | 五〇 |
| ホイットマン雄感―詩人の宗教と内村鑑三に関連して―  | 小玉 | 晃一 | 五三 |

## シェイクスピアと聖書——清水護

### I

シェイクスピアがどういう風にして聖書と親しんだか、正確な伝記が得られないため、詳かにできないが、幼少の頃から教会生活を通じて日本人には想像できないほど聖書を教えられたり、また自ら求めて知る機会があったであろうとは想像できる。この場合、英国国教会で用いる『祈禱書』も重要な役割を果たしていたであろうと思われる。それからもう一つ、当時の英国国民の日常用語が、他の諸外国には見られないほど聖書の影響を受けていたことも念頭におく必要がある。劇作家としては、耳から聞いてすぐ観客に受け入れられ易いことばを用いることが大切であるから、わかりにくいことばや比喩は避けたらうと思われる。従ってシェイクスピアの作品を読んでも、逆に当時の一般人の英語の体質を察することができる。その体質の中には、中世以来の伝統的道德劇とか神秘劇とか呼ばれるものを通じて、聖書の内容が普及していたと思われるので、直接聖書を読まなくても、その内容および用語までも、いつの間にか作者をはじめ、一般の人々の脳裡に刻まれているという場合も多くあったであろう。

またシェイクスピアが実際に聖書に親しんでいたとしても、どの訳を愛用したかが問題にな

る。一六一一年初版の欽定訳聖書 (Authorised Version—AV と略す) は製作年代から推してもシェイクスピアの作品の中にてでくる用語とは結びつかない。いろいろこの点も研究されていて、恐らく、一五六〇年ジュネーブで刊行された Geneva Bible がシェイクスピアの聖書であつたろうというのが、学者間の大体一致した意見である。よつて本稿においても、一応シェイクスピアのテキストと聖書の関係を探るときは、Geneva Bible を対象に比較することとする。(一九六九年に一五六〇年版のリプリントがウィスコンシン大学出版部から刊行されたので、比較研究には極めて貴重な便宜が得られるに至つた。)

直接であらうと間接であらうと、シェイクスピアが聖書に負う表現を用いる時、種々雑多な形態を以て文飾とし、時には含蓄を深め、時には quibble (かけことば) として興をそそり、時には文型はそのままでも別個の意味に用いて新しい生命を特定の語句に注ぐこともある。また巧みに換骨奪胎されていて、一見それと気付かれず、しかもシェイクスピア自身の独創的秀技な表現として人口に膾炙したものも少なくない。シェイクスピアの作品全般にわたつて取材すると余り散漫になるおそれがあるので、本稿では史劇そのほかにも言及するが、主として「オセロ」と「マクベス」と「ハムレット」の一部分に集中して実際の用法を見よう。

「ヴェニスの商人」(I, III, 100) には The devil can cite Scripture for his purpose (悪魔も自分の都合のよいように聖句を引用する) というアントニオの面白い句があるが、シェイクスピアの作を見ると、案外悪魔的な人間が自由自在に聖句を弄ぶ場面が多い。まず悪党中の悪党である

イアゴの例から始めよう。

イアゴといえは、

When devils will the blackest sins put on,

They do suggest at first with heavenly shows,

As I do now, (2. 3. 356/356 ft.)

(悪魔が人間に大それた罪をそそのかそうとするときには、最初はまず天使の姿をかりて誘いをかける、今のおれがそれだ——三神詠)

と自ら云っているように悪魔的であることを自認している男で、今の台詞は Satan himself is transformed into an Angel of Light (サタンも光の天使に擬装する) というコリント後書(一一、一四)の句を自分の口で云い換えたものと見ることができる。これより先、イアゴは類似の内容を I am not what I am (おれさまは見かけとはちがうんだ——三神詠)(一一、六五)と云っている。これは、「おれは言行一致の人間ではない。うっかり腹の中をそぶりに出したら、とんだ目に会う」という意味の言葉に続く句である。一見何の変哲もないように見えるが、この句は出エジプト記三、一四—And God answered Moses, I AM THAT I AM と関係がありそうである。即ちエホバがモーセに語られたように I am that I am (「我は有て在る者なり」この 'that' は今日是用いない。'that which' とか 'what' または 'who' とすべきである) を否定的に用いたのではないかと考えられるが、'what' とあるため、何等の抵抗もなく読過する。ところがずっとあと(四、一、

二八一)でオセロがたいへん取り乱すのを見て、ヴェニスから来たロドヴィコがイアゴに「オセロは気が変ではないか」と尋ねるとイアゴが *He's that he is* (ご覧のとおりです) と答えるのに出会う。この *'that'* は今日の英語としてはたしかに異様に感じられるところで、文型からすると *I am that I am* のパロディではないかと疑いたくなる。しかしこの二つだけでは、まだその可能性を主張する根拠はうすいと言わねばならない。ところが、シェイクスピアのソネット第一二一篇には、何故人はおのがみだらな偽りの目で他人の行を見ようとするのか、自分の行いを目安として人の行いを云々するのはよしてもらいたい、いな *I am that I am* (我は我なり) …と歌っている。この *'I am that I am'* はなかなか重要な句のようで、シェイクスピアの文章構造の中にはこの句が強力なボタンとして君臨していたのではないかとさえ思われる節がある。従ってさきのイアゴの二文も意識的にこのボタンによったものと考えてよいのではなからうか。

さらに「十二夜」(一、五、一九四以下)を見ると、ヴァイオラが男装して小姓の姿で伯爵夫人オリヴィアに使いに来た時、オリヴィアから *Are you a comedian?* (あなたは喜劇役者なの) と聞かれて *I am not that I play* (ただ今勤めています役目通りの者ではございません) と答えるのも、「ヘンリ六世」第三部(五、六、八三)で、王を殺してから、自分には兄弟もない、愛もないというグロスタの *I am myself alone* (おれはおれだけだ) という悲痛な声(これは構文的には変化がある)も *'I am that I am'* の変形と見て良さそうである。英訳聖書のこの句の訳は分りにくいのであるが、*Geneva Bible* も *AV* も大文字で特筆大書しているので、見逃すことのできないこ

ろである。この厳肅な神の言葉をシェイクスピアはソネットの中で完全に自分のことばとし、それが核となって、いくつかの自我主張の表現を生み出したと見られるが、バイロンの「カイン」(「ハムレット」の影響が著しいようである)の中で、神(天使)に挑戦的態度をとるカインの「That which I am, I am」(Ⅲ、一、五〇九)も注意してよいことばである。これは I am that (=that which) I am をひっくり返しただけで、意味は「(このままの)「我—自分—が我—自分である」即ち「我は我なり」と解してよいであろう。(因に島田勤二氏の訳文では「この今見るとおりの人間が即ち私というものだ」と碎いてある。別に説明はない。)(こは直接「出エジプト記」によるというよりも「カイン」の他の関連点から見て W. Knight が *Shakespeare and Religion* (二四頁)でも言っているように、シェイクスピアによったと見る方が適當であろう。

I am that I am が静的姿勢とすれば、これに「動」が加はると I will (do) what I will となる可能性がある。このことはローマ書、九・一五、一八などを見ると想像がつくところで、神の側からすれば意志力の発動といえよう—

For he saith to Moses, I will have mercy on him, to whom I will show mercy...18  
Therefore he hath mercy on whom he will, and whom he will, he hardeneth.

(神はモーセに言い給う「われ憐まんとする者をあわれむ…」と…一八されば神はその憐まんと欲する者を憐れみ、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給う)(これは出エジプト記三三、一九などにも基

づく)

この考はカルヴィンのいう予定説につながるものと言えるが、ここで興味をひくのは、イヤゴにそそのかされて酩酊し、ついに次のように口走るキャシオの句である。

Well, God's above all; and there be souls must be saved, and there be souls must not be saved. (2.3.105ff.)

(いいか、神万物をみそなわせたまう。救われなきゃならん人間もありゃ、救われちゃならん人間もある)(後半大山訳)。

換言すれば、神が必ず救って下さる人間と、どうしても救われない人間とがいる、という意味にとれる。何故シェイクスピアはこういう文句をキャシオにしゃべらせたかについて、それはシェイクスピアのカルヴィニズムに対する批判であろうと見る人もあるであろうが、おそらく当時、世間でしばしば人間の選びの問題が話題となったため、酔興に引合いに出しただけものではなからうか。これだけでシェイクスピアの宗教思想を云々する資料にまではなるまいと思われる。選びの思想は神のことば *I am that I am* に「動」の加わったものとの見方をしたが、ここで一応「静」の形に戻って考えよう。このことばは平たく言えば元来エホバの自己紹介のことばであった。それをシェイクスピアが自分のもの、更に人間自身のことばとして取ってしまい、神への反抗のことばにまで発展しかけた訳であるが、「カイザルのものはカイザルに……」の故智にならって、神のことばは一応神にお返しする形をとってこの一段を結びたい。それには、C・スマーットの「ダビデへのうた」(これには斎藤勇博士の訳文付解説がある)の一節を借りることとする。

その前に、上に引いた「出エジプト記」三<sup>注</sup> 一四の後半の句を念頭をおいておく必要がある。神はモーセに「我は有て在る者なり」と言われたあと次のように命じておられる――

Also he said, Thus shalt thou say unto the children of Israel, I AM hath sent me unto you.

（また言い給ひけるは、汝か、くイサラエルの子孫<sup>みくらと</sup>に言うべし、我有<sup>われあり</sup>という者、我をなんじに遣し給うと）さきに触れた He is that he is は形だけから云えば I am that I am を三人称として置き換えたと思得るが、スマートの例では二人称で神の属性をたたえる恭順のことばである。

Tell them I am, JEHOVA said

To MOSES; while earth heard in dread,

And smitten to the heart,

At once above, beneath, around,

All nature, without voice or sound,

Replied, O Lord, THOU ART. (*A Song to David*, xi)

（エホバはモーセに「我は在り」と告げよと仰せられた。時に大地はこれを聞いて畏れ、心打たれて左右上下を問はず、無言のうちにかく答えた「おお主よ、汝います」と）

注 この部分の近代訳では R. Knox 訳が分りやすいようである。（おらに詳しく脚注までつけている）

And God said to Moses, I am the God who IS; thou shalt tell the Israelites, THE GOD WHO IS has sent me to you.

## II

人間の体を神の霊の在所、即ち神の宮 (temple of God) と呼ぶのは、英語では古く十世紀末の新約聖書からの伝統である。ラテン語聖書の行間に英訳を添えた古い福音書 (Rushworth Gospels と呼ばれる) のヨハネ伝二・一九、二一の「なんぢらこの宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん」「これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり」が発想のもとのようで、コリント前書三、一六の「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊<sup>みたま</sup>なんぢらの中に住み給うを」、同じく六、一九の「汝らの身は…神より受けたる聖霊の宮にして…」など決定的聖句と考えられる。シェイクスピアは temple をこの意味でたびたび使っている。とくに「シムベリン」に多い。また「ハムレット」的一幕三場一二行以下でレアティーズの言う

as this temple waxes,

The inward service of the mind and soul

Grows wide withal.

(この宮なる肉体が成長するにつれ、内部にある精神や霊の働きも同時に大きくなる)

も思い併はされるが、最も興味をひくのは「マクベス」で、重臣マクダフが朝早くマクベスの館へダンカン王を迎えに来てその異変を知った直後の驚きと憤りのことばである。

Most sacrilegious murder hath broke ope

The *Lord's anointed temple*, and stole thence

The life o' the building! (2. 3. 72ff.)

(極悪非道の弑逆が神の聖い宮居をこぼち、その命を奪い去ったぞ)

いかに使われつつ The *Lord's anointed temple* はサムエル後書一・一四、一六—

How wast thou not afraid, to put forth thine hand to destroy *the anointed of the Lord*  
(= the king) ?

Thy blood be upon thine own head : for thine own mouth hath testified against thee,  
saying, I have slain *the Lord's anointed* (= the king).

(汝なんぞ手をのばしてエホバの油をそそぎし者をころすことを畏れざりしや)

(汝の血は汝の首に帰せよ、そは汝、口ずから我エホバの油そそぎし者を殺せりと言えり—忠誠なダビデ  
がソウル王の死を悲しむ一節)

などといっしょに考える必要がある。‘anoint’は聖油を(頭に)注いで聖別する意であり、旧約  
時代には王となる時の儀式の一部であつたと思われる。ソウル王を殺そうと思えば殺せる時、  
ダビデが部下を戒めたサムエル前書二六、九の *Who can lay his hand on the Lord's anointed*, and  
*be guiltless?* (エホバが油を注がれた者に向つて手をのべ、罪を得ない者があろうか)という句もマクダ  
フの憤りの裏に感ぜられるが、マクダフの一言は旧約の *the Lord's anointed* と新約の *temple*

注 列王紀上 一一' 一一一—Then he brought out the king's son, and put the crown upon him and

gave him the Testimony, and they made him king: also they anointed him and clapt their hands, and said, God save the King.(そのころエホヤダは王の子をつれ出して冠をいただかせ、律法の書を渡し、彼を王と宣言して油を注いだので、人々は手を打って「王万歳」と言った。(英國国歌の“God save the king”は同じかな))

とを巧みに併せたものといえる。これは the Lord's+(anointed)+temple と、the Lord's+(anointed temple) と、多少無理を承知のうえに the Lord's anointed ('s) temple とを解される。何れにせよ、シェイクスピアは‘anointed’を好んで用いている。「リチャード二世」で、離反者多く、王リチャードの身辺日に危うきを増し、王は瀕死の重病人に比すべきであるのに、それをさらない王に対して、叔父にあたるガントのシモンは

And thou, too careless patient as thou art,

Commit'st thy anointed body to the cure

Of those physicians that first wounded thee. (2. 1. 97 ff)

(あなたは全く病状を顧みず、尊い身体の治療を、はじめに我が身を傷つけた医者どもに任せている)と忠告する。ここでは「玉体」に見るように anointed は単なる敬語と化しているとも感ぜられる。続いて王リチャードに反逆の軍を起したボリングブルックの勢を案ずる声に対して、王は

Not all the water in the rough rude sea

Can wash the balm off from an anointed king. (3. 2. 54 f.)